朝鮮良善叢書

第一編 改訂小學總論

311-104

311
104

始

改訂小學總論

朝鮮良善叢書第一編

改訂小學總論

朝鮮總督府圖書館藏版

發行所寄贈本

311
104

朝鮮良善叢書發刊之辭

半島與漢土接壤浴其文化之藜光在東亞諸國中最先者理勢然也據史則半島文明肇基於箕子東來然時代邈遠杞宋無徵其眞僞未易判且以偏僻之小域經歷代外患內憂所謂傳世之寶盡歸於灰燼故史實之可究者殆鮮矣如金富軾三國史記雖是朝鮮最古史其撰在三國既亡數百年之後而其所述亦不過依準於班馬陳劉舊典間以補綴地方傳說者則當時正史皆失其傳不可復覩矣擧此一事可知上代朝鮮典籍之全貌是以和漢學者多以爲朝鮮之書無益於

研學置而不顧豈非可惜也哉

余在學于京都帝國大學之日始繙東國輿地勝覽京都篇概知麗末李初典籍傳襲之經過後讀高麗史宣宗辛未使臣還自宋奏云帝聞我國書籍多好本命館伴書所求書目錄授之更閱至其書目中京房易十卷東觀漢記一百二十七卷括地志五百卷于寶晉記二十二卷魏澹後魏書一百卷魚豢魏略王羲之小學篇文館詞林一千卷高麗風俗紀一卷高麗志七卷等記事未嘗不掩卷感歎者此可比類於藤原佐世之日本國見在書目也竊想半島文獻介在於和漢兩學界

之間爲其關鍵連繫甚重豈可輕視哉

惟明治庚戌併合以後皇化遍照治績日進民安其堵百廢俱興而特於文教加意闡揚如史庫本之散在於各地者聚集于中央之類是也由是半島典籍始得見重焉大正甲寅余奉職于李王職督理茂朱赤裳山舊藏又觀奎章閣所藏數十萬卷不勝驚歎誠富矣庶矣然見今半島學界際於景運之會急於進步之階唯恐舊物之堙滅澌盡若失時不蒐集而講其保存之策則安知異日無莫追之悔也大正癸亥創設本館以若余之乏才乃當斯役者謂特加努力於博採墳典爲圖

壽世是吾一生精力之有所端緒也蓋於典守文獻雖須臾不可放念往在大正甲寅歐洲之大亂同癸亥東都之大震今上丁丑之支那事變等不測災厄不無玉石俱焚之歎乃廣刊珍藏以備不虞亦豈非嘉惠後人之一道乎

昨戊寅十一月本館創立十五周記念之時胥議始刊朝鮮良善叢書卽此改訂小學總論爲第一編也卷末載司書靑木學士之解題將付剞劂氏學士囑余以卷頭之辭不可以不文辭也蓋小學之書自灑掃應對以至事君愛親敬長隆師親友之道而爲大學治國平

天下之階梯此乃宋儒實踐躬行之要訣也其註疏纂輯不可以十百數之而是書李朝儒宗朴南溪世采之所撰也歿後未幾其長胤泰殷依遺言進于春宮爲王世子之所案珍而手澤尙有存焉可謂稀覯之書也博雅君子無以此一編小册子爲貶深諒乎吾等獻芹之微忱云爾

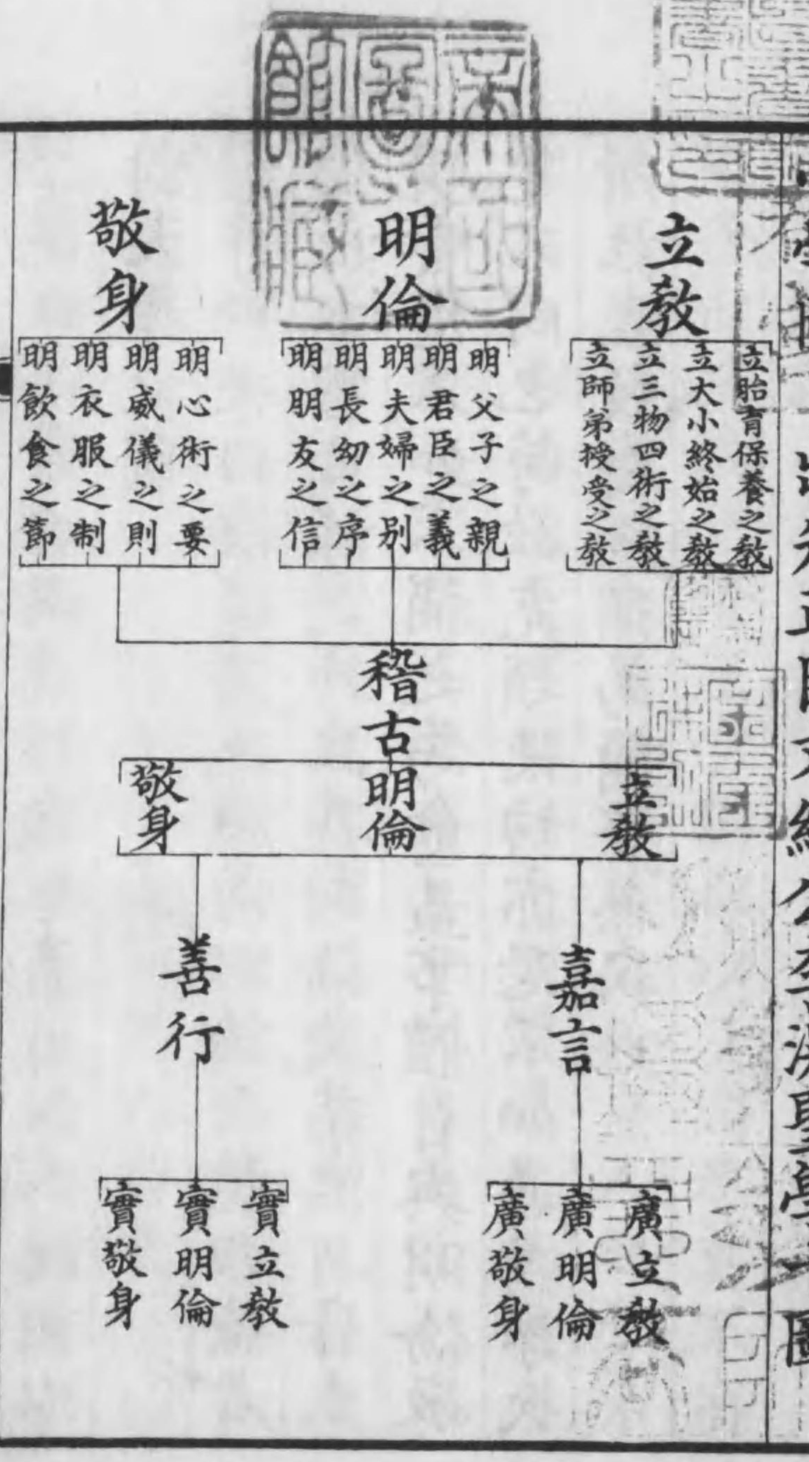
昭和十四年己卯元旦

於忠淸南道溫陽旅舍

朝鮮總督府圖書館長　荻山秀雄　識

小學圖

出先正臣文純公李滉聖學十圖



李滉曰小學古無圖謹依本書目錄為此圖以對大學之圖

○朴世采曰按退溪此圖所以論立教四條者獨出本書目錄之外且其所論次第品目皆未明當恐不如不補之為愈蓋事體自與明倫敬身不同也苟欲充類使均亦恐不如遵用李氏所註立教之說猶為簡整無病也

改訂小學總論

朱子曰三代之隆王宮國都以及閭巷莫不有學人生八歲則自王公以下至於庶人之子弟皆入小學而教之以灑掃應對進退之節禮樂射御書數之文及其十有五年則自天子之元子衆子以至公卿大夫元士之適子與凡民之俊秀皆入大學而教之以窮理正心修己治人之道此又學校之教大小之節所以分也

○問今子方將語人以大學之道而又欲考乎

小學之書何也曰學之大小固有不同然其為道則一而已是以方其幼也不習之於小學則無以收其放心養其德性而為大學之基本及其長也不進之於大學則無以察夫義理措諸事業而收小學之成功是則學之大小所以不同特以少長所習之異宜而有高下淺深先後緩急之殊非若古今之辨義利之分判然如薰蕕氷炭之相反而不可以相入也今使幼學之士必先有以自盡乎灑掃應對進退之間禮樂

射御書數之習俟其既長而後進乎明德新民以至於止善乃次第之當然又何為而不可哉○古人之學固以致知格物為先然其始也必養之於小學則在乎灑掃應對進退之節禮樂射御書數之習而已聖賢開示後人進學門庭先後次序極為明備○古人由小學而進於大學其於灑掃應對進退之間持守堅定涵養純熟固已久矣大學之序特因小學已成之功

○問大學與小學不是截然為二小學是學其事大學是窮其理以盡其事否曰只是一箇事小學是學事親學事長且直理會那事大學是就上面委曲詳究那理其所以事親是如何所以事長是如何古人於小學存養已熟根基已深厚到大學只就上點化出些精采

○泛論知行之理知之為先行之為後無可疑者然合夫知之淺深行之大小而言則非有以先成乎其小亦將何以馴致乎其大者哉此小

學之事知之淺而行之小者也大學之道知之深而行之大者也

右通論小學大學（即通論小學大學規模次第）

程子曰古者八歲入小學十五入大學擇其才可教者聚之不肖者復之農畝蓋士農不易業既入學則不治農然後士農判在學之養若士大夫之子則不慮無養雖庶人之子既入學則亦必有養古之士者自十五入學至四十方仕中間自有二十五年學又無利可趨則所志可

知須去利趍善便自此成德後之人自童稚間已有汲汲趍利之意何由得向善故古人必使四十而仕然後志定只營衣食却無害惟利祿之誘最害人

○朱子曰古人小學教之以事便自養得他心不知不覺自好了到得漸長更歷通達事物將無所不能今人既無本領只去理會許多閑汨董百方措置思索反以害心

○古之學者八歲入小學學六甲五方書記之

事十五而入大學學先聖之禮樂焉非獨教之固將有以養之也蓋理義以養其心聲音以養其耳采色以養其目舞蹈登降疾徐俯仰以養其血脉以至於左右起居盤盂几杖有銘有戒其所以養之之具可謂備至爾矣夫如是故學者有成材而庠序有實用此先王之教所以為盛也自學絶而道喪至今千有餘年學校之官有教養之名而無教之養之之實學者挾策而相與嬉其間其傑然者乃知以干祿蹈利為事

至於語聖賢之餘旨究學問之本原則罔乎莫知所以用其心者其規為動息舉無以異於凡民而有甚者焉嗚呼此教者過也而豈學者之罪哉然君子以為是亦有罪焉爾何則今所以異於古者特聲音采色之盛舞蹈登降疾徐俯仰之容左右起居盤盂几杖之戒有所不及為至推其本則理義之所以養其心者固在也諸君日相與誦而傳之顧不察耳然則此之不為而彼之久為又豈非學者之罪哉問教小學當以何為主呂

氏祖謙曰先教以恭謹不輕忽不躐等讀書乃餘事今之有資質者父兄便教以科舉之文皆因父兄無識見至有以得一第為成材者○陸氏九淵曰古者教小兒自能言能食即有教以至洒掃應對之類皆有所習故長大易語今人自小即教做對稍大即教作虛誕之文皆壞其性質

右小學大學之反即言小學大學之教不行於後世也

程子曰古之人自能食能言而教之是故小學之法以豫為先蓋人之幼也知思未有所主則當以格言至論日陳於前使盈耳充腹久自安習若固有之者後雖有讒說搖惑不能入也若

爲之不豫及乎稍長意慮偏好生於內衆口辨言鑠於外欲其純全不可得也

○勿謂小兒無記性所歷事皆能不忘故善養子者當其嬰孩鞠之使得所養全其和氣乃至長而性義教之示以好惡有常至如養犬者不欲其升堂則時其升堂而扑之若既扑其升堂又復食之於堂則使孰從雖日撻而求其不升不可得也養異類且爾況人乎故養正者聖人也

○張子曰古之小兒便能敬事長者與之提携則兩手奉長者之手問之掩口而對蓋稍不敬事便不忠信故教小兒且先安詳恭敬

○朱子曰小學多說那恭敬處少說那防禁處

○教小兒只說箇義理大槩只眼前事或以洒掃應對之類作段子亦可每常疑曲禮衣毋撥足毋蹶將上堂聲必揚將入戶視必下等叶韻處皆是古人初教小兒語列女傳孟母又添兩句曰將入門問孰存

○問小學父慈而教子孝而箴曰人既自有箇良知良能了聖賢又恁地說直要人尋教親切父慈而教子孝而箴看我是能恁地

○問小學載樂一段不知今人能用得否曰姑使知之古人自小即以樂教之乃是人執手提誨到得大来涵養已成稍能自立便可

○弟子職毋驕恃力如恃氣力欲胡亂打人之類蓋自小便教之以尚德不尚力之事

○小童添炭撥開火散亂曰可拂殺了我不愛

人恁地此便是燒火不敬所以聖人教小兒洒掃應對件件要謹禁

○教小兒讀詩不可破章

○授書莫限長短但文理斷處便住若文勢未斷者雖多授數行亦不妨蓋兒時讀書終身改口不得嘗見人教兒讀書限長短後来長大後都念不轉如訓詁則當依古註

○問女子亦當有教自孝經之外如論語只取其面前明白者教之如何曰亦可如曹大家女

戒溫公家範亦好呂氏祖謙曰後生小兒學問且須理會曲禮少儀儀禮等學洒掃應對進退之事及先理會爾雅訓詁等文字然後可以語上下學而上達自此脫然有得不如此則是躐等終不得成就也○許氏衡曰凡人幼少時不引得正後便雜了如字畫端楷之類○吳氏澄曰古之教者子能食而教之言欲其有別也而教之以異處欲其有讓也而教之以後長因其良知良能而導之而未及乎讀誦也教之數教之方教之日與夫學書計學幼儀則既辨名物矣而亦非事夫讀誦也弟子之職曰孝曰弟曰謹曰信曰愛曰親行之有餘力而後學文今世童子甫能言不過教以讀誦而已其視古人之教何如也然古人豈廢讀誦哉戴氏記拾曲禮遺言句三言或四言管氏書載弟子職一篇句四言或五言六言皆韻語句短而音諧蓋取其讀誦之易而便於童習也

右小學即專言小學之教

朱子曰後生初學且看小學書那箇是做人底樣子

○修身大法小學書備矣義理精微近思錄詳之陳氏淳曰朱子小學書綱領甚好最切於日用雖至大學之成亦不外是○李氏方子曰先生年五十八編次小學書成以訓蒙士使培其根以達其支內篇四曰立教曰明倫曰敬身曰稽古外篇二取古今嘉言以廣之善行以實之雖已進乎大學者亦得以兼補之於後修身大法此畧備焉○許氏衡曰衍內篇之言以合外篇則知外篇者小學之枝流約外篇之言以合內篇則知內篇者小學之本源合內外而兩觀之則小學之規模節目無所不備矣○小學

之書吾信之如神明敬之如父母

右編小學書即朱子集諸書編作今小學書之意

朱子曰古人於小學自能言便有教一歲有一歲工夫到二十來歲聖賢資質已自有三分了而今都蹉過了不能更轉去做只據而今地頭便劄住立定脚跟做去如三十歲覺悟便從三十歲立定脚跟做去便年八九十歲覺悟亦當據現在劄住做去

○問某自幼既失小學之序矣請授大學何如

曰授大學也須先看小學書只消旬月工夫

○李周翰請教屢歎年歲之高未免時文之累曰這須是自見得某所編小學公宜仔細去看也有古人說話也有今人說話

○問某今看大學如小學中有未曉處亦要理會曰相兼看不妨學者於文為制度不可存終理會不得之心須立箇大規模都要理會得至於明暗則係乎人之才如何耳

右過時不學即使過時不學者必先讀小學之意

問幼學之士以子之言而得循序漸進以免於躐等陵節之病則誠幸矣若其秊之既長而不及乎此者欲反從事於小學則恐其不免於扞格不勝勤苦難成之患欲直從事於大學則又恐其失序無本而不能以自達也則如之何朱子曰是其歲月之已逝者則固不可得而復追矣若其工夫之次第條目則豈遂不可得而復補耶蓋吾聞之敬之一字聖學之所以成始而成終者也為小學者不由乎此固無以涵養本

源而謹夫洒掃應對進退之節與夫六藝之教為大學者不由乎此亦無以開發聰明進德修業而致夫明德新民之功也是以程子發明格物之道而必以是為說焉不幸過時而後學者誠能用力於此以進乎大而不害兼補乎其小則其所以進者將不患於無本而不能以自達矣其或摧頹已甚而不足以有所兼則其所以固其肥膚之會筋骸之束而養其良知良能之本者亦可以得之於此而不患其失之於前也

曰然則所謂敬者又若何以用力耶曰程子於此嘗以主一無適言之矣嘗以整齊嚴肅言之矣至其門人謝氏之說則又有所謂常惺惺法者焉尹氏之說則又有所謂其心收斂不容一物者焉觀是數說足以見其用力之方矣曰敬之所以爲學之始者然矣其所以爲學之終也奈何曰敬者一心之主宰萬事之本根也知其所以用力之方則知小學之不能無賴於此以爲始知小學之賴此以始則夫大學之不能無

賴乎此以爲終可以一以貫之而無疑矣

○如今全失了小學工夫只得教人且把敬爲主收斂身心却方可下工夫或云敬當不得小學某看來小學却未當得敬敬已是包得小學敬是徹上徹下工夫雖做得聖人田地也只放下這敬不得

○今人不曾做得小學工夫一旦學大學是以無下手處今且當自持敬始使端的純一靜專然後能致知格物陳氏淳曰程子說主敬工夫可以補小學之闕蓋主敬可

以收放心而立大本大本既立然後大學工夫循序而進無往不通大抵主敬之功貫始終一動靜合內外小學大學皆不可無也

右敬補小學即過時不爲小學則當以敬補小學之闕工

嘗觀四書讀法論孟則卽朱子取程子語以成之學庸則乃 皇朝纂修經書大全時諸臣因新安倪氏所輯朱子說以整之但論孟之例一條爲一義學庸之例各以義同者相附今此小學書亦有總論本出集說似亦沿襲於集成諸書然其所錄者重復猥雜義趣

不明殊與論孟學庸見成之規不同茲敢只取程張朱諸子語以修之其以義相附與以諸家說分註於逐條者用學庸讀法之例惟其總論之名則仍舊蓋所錄非特爲讀法故也庶幾讀此書者因是先曉本原緊要底大義以至於深知而力行之謹記其意於後如右

先正臣文純公朴世采改訂

改訂小學總論解題

青木修三

朝鮮の儒學はその東漸以來特殊の發展を遂げ政教の基礎となつたことは絮說を要しない處である。しかし學者の研究が兎角千變一律となつた嫌はあるが朱子の學說は常に太陽的地位を占めたのであつた。朱子學は儒學中最も純正穩健なるものであると一般に思惟せられ苟くもこれと志向や所見を異にする學派の擡頭を殆んど許さなかつたのである。一部學者間に於ては或は多少活潑なる論爭の展開があつたとしてもその究極に於ては朱子學を中心とせざるを得なかつたが故に思想上の發展とか飛躍とかいふものは到底見られなかつたのである。從つて朱子の高足である劉子澄がその指授を受け修身齊家治國平天下の入門教本として纂輯した小學書が雞林八道の都鄙に洽く童蒙の先習書として尊重敬讀された所以も亦此處にあるのである。そしてこの小學書の普及は李朝の中葉に於て最も徹底熾烈化されたと見るべきであるがこの氣運を皷吹した者は實に寒暄堂金宏弼その人であつた。宏弼は老境に入つてか

らも小學童子を以て自任しただけあつて小學派の熱心なる統領であり又指導者でもあつた。加之朝鮮肅宗二十年正月に王は朱文公小學序文を親製せられそれを篇首に冠したのであるがその一節に於て

小學何爲作也。古之人生甫八歲。必受是書。卽三代敎人之法也。

と言はれた事實に徵しても當時の學者乃至爲政者が如何にこの小學書に對して深甚なる關心を以てゐたかが推察出來ると思ふ。

斯く小學書が愛讀書といふよりも寧ろ必習書として重んぜらるゝに從つて註疏釋義の類が枚擧に暇ない程編纂せられた。この改訂小學總論は、朝鮮肅宗朝の逸士朴世采の纂輯に係るものである。その內容は第一章通論小學、第二章小學大學之反、第三章小學、第四章編小學書、第五章過時不學、第六章敬補小學の六章から成つてゐる。先生は新しい意圖と獨自の見解とを以て良心的に本書を改訂したから我等の心田を啓培するに足る點がかなり多い。

著者朴世采字は和叔、南溪と號し仁祖九年辛未六月、漢城倉洞の寓第に於て生れた。初め京畿の玄石に起居したので、玄石先生と呼ばれたが後年に至つて坡州南溪に轉住したからまた南溪先生とも稱されたのである。先生は天姿明

粹、德性溫醇、幼にして淸陰金尙憲の門に入り學業異常の進境を遂げ弱冠にして進士高等に登つた。孝宗朝に於ては太學の諸生を率ゐて栗谷李珥、牛溪成渾兩先賢の文廟從祀を請ふ疏を上つたがそれが允されざるや斷然意を決して擧業を廢し專ら性理學を攻め刻苦精勵寢食を忘るゝに至つたのである。而してその門下には常に學徒が蝟集し、一世の儒宗と仰がれ時人の尊敬の的となつた。嘗て顯宗は先生を學德の高い遺賢として屢々召致する處があつたが、遂に入朝仕官することがなかつたのである。肅宗朝に於ても數次に亙り別諭を下して召された恩寵に感激して漸く出仕したが紛糾せる政情に慊らず朝に立つこと僅か數月にして野に下り故山に退隱した。肅宗二十一年二月五日、六十五歲を一期として溘焉と他界したのである。先生の訃報が朝廷に達するや王は

左議政朴世采。負一世之重望。爲士林之領袖。平生言行。必遵禮法。

逮登台位。正色立朝。

と言はれ特に祭需と祿俸とを優給された。門人の服を持する者二百餘人、葬に赴く者千餘人と記されてゐる。以て先生の學識德望を想見することが出來るであらう。文純と謚せられた。後、肅宗の廟庭に配食し英祖朝には文廟に從享

せられる榮譽を擔つた。先生の學統及び言行の傳ふべきものは尠くないが省略することにした。唯先生は當時の碩學尤庵宋時烈、明齋尹拯と相好く後この兩人が反目するに及び兩者の間を調停したといふ逸話を記すに止める。

先生の著述南溪集は正集八十七卷外集十卷續集二十二卷計百十九卷五十九册の浩瀚なものである。同書第五十三卷の改訂小學總論を見るに、その纂輯が丙寅の年二月十一日とある。丙寅は肅宗十二年であるから、先生の歿前十年に相當するのである。この丙寅本こそ實に本書のことをいふのではなからうか。卽ち朝鮮陞廡儒賢年表附玄石先生年譜乙亥條(肅宗二十一年)に

先生病時。聞世子將讀小學。遂將平日所輯小學讀書記。更加整頓。欲趁世子入學前進御。積誠編摩。書纔成而卒。長子泰殷以先生遺意。更爲繕寫。陳疏投進。

とあり、又肅宗實錄二十一年三月三日の條には

前判官朴泰殷。在憂服中。以其父世采遺命。詣闕陳疏。進小學集註附錄。答曰先卿爲春宮眷眷之誠。至此彌篤。不覺感歎。當下春坊以資勤講。

とあるが如きはこの間の消息を傳へるものといふべきであらう。惟ふにこの

寫本は世采が病臥中に王世子(後の景宗)が始めて小學書を學習するとのことを聞くに及び平素纂輯しておいた小學書に更に改訂を加へ世子の入學前に進御すべく鋭意編纂したのであるが不幸にしてその直前に他界し長子泰殷が先生の遺志に從つてその翌年(肅宗二十一年三月)に情を具して上進したもので無からうか。更に之を詳細に檢討すれば卷頭に押捺された『春宮』の印は肅宗の第一王子昀のことで先生の歿年に入學適齡の八歲であつたといふ事實及び同年三月二十一日に王世子入學敎書が下つたといふ事實本書の字體が謹嚴そのものである點等より見て本書は先生の長子である判官朴泰殷が上進した原本であると斷じて可なりと思はれる。若し假りに本書が朴泰殷の上進原本でなく又當時の王世子(景宗)の手澤本でないとしても或る王世子の手澤本であつたことは卷頭に捺された『春宮』の印の明示することに依つて容易に推測することが出來ると思ふ。なほ卷頭には『誠敬日疆』『善師惡否』卷末に『霞標』等の印が見える。

次に本書と本館庋藏の槧本南溪集に收錄されてあるそれとを校勘するに少しばかりの逕庭が認めらるゝに過ぎないのである。今それを擧ぐれば後者に

は小學圖の所載がなく又文字の出入が僅か三字ある。卽ち

南溪先生文集　第五十三卷

第二十丁　上　第四行小註右行第四字

『兒』――『學』(本書)

第二十丁　上　第六行小註右行第十字

『子』――『兒』(本書)

第二十四丁　下　第一行第三字

『而』――『而』脫(本書)

更に本書の體裁を見るに縱一尺一寸五分橫七寸三分每丁十八行每行十八字詰總紙數十五丁そして料紙は上等の朝鮮壯紙である。正楷の端正なる字體で書かれ餘り類例のない立派なる寫本といふべきものである。本書の玻璃版複製に際して聊か匡郭が蹙まつたのは遺憾であるがその他は出來得る限り原本の樣相を髣髴せしむることに勉めた。

吾が朝鮮總督府圖書館は文獻の保存てふことに就いて絕大の努力をなし時としては全館員に圖書の蒐集閱覽以上に關心を持たしむべく訓練してある。

それと共に進んで良書善本特に朝鮮關係のものを複製して一般に頒布しより一層文獻報國の使命達成をなさんと計畫してゐたが期未だ熟せず荏苒歲月が流れた。昭和十三年十一月本館創立十五周年を記念すべく朝鮮良善叢書を發刊することゝなり其の第一編として選擇せられたのが卽ち本書である。私は館長の命に依り解題をものしたが意に滿たざる處が甚だ多い。因みに卷首の扉は館長の揮毫を煩はした。題簽はその縮刷である。

附　記

朝鮮良善叢書第一編改訂小學總論は昭和十四年陽春の候を期して發兌の豫定であつたがその頃から私は大患に罹り全癒したのが奇蹟だと云はれ爾後健康恢復に數年を要した。加ふるに戰時下用紙の配給と印刷困難等の諸問題と絡んで意外に遷延し創立十五周年記念出版が遂に二十周年のそれになつて了つた。當時本館機關雜誌文獻報國に發賣頒布の廣告までも出し洵に恐縮する次第である。斯く不慮の蹉跌に遭つて本書が漸く世に出たのであるが第二編以下は周密なる立案のもとに今から準備を整へ置き平和克服の曉には續々嗣出せしむる考へである。幸に大方諸賢の御支援を希望する。

昭和十八年十一月三十日創立滿二十周年記念日

著作權者　朝鮮總督府圖書館

發行所　朝鮮印刷株式會社

印刷者　吉村守雄

製本控　伺第　號

311 函	104 號	年　月　日

書名　朝鮮良善叢書（第1編）

著者

受入　20年　9月　14日　1冊

備考

昭和十八年十一月三十日創立滿二十周年記念日

荻山秀雄 又識

八

限定五百部
內第340號

昭和十九年五月十五日印刷
昭和十九年五月二十五日發行

朝鮮良善叢書 第一編
改訂 小學綴論

發行所 京城府中區南大門通二丁目 朝鮮總督府圖書館

印刷所 京城府西大門區蓬萊町三ノ六二 朝鮮印刷株式會社

印刷人 京城府西大門區蓬萊町三ノ六二 吉村守雄

終